



一隅を照らそう
8月号

343号
毎月28日発行

E-mail: info@tougakuin.jp



四つの真理

住職 中島 有淳

仏教の視点から、コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻の暴挙をどう捉えたら良いのか。近頃、どうしてもそんな風に考えてしまっています。つまり仏の教えから、こうした世相をどう考え学べば良いのでしょうか、ということなんです。求めた先の答えはとかく絵に描いた餅の理想論のように思われ、お腹が膨らみ力が充るような満足感を得られるのが難しいところなんです。

でも……。努力しなければと思うのです。

私たちの神仏に対するアンテナを、少しでも自分で努力して磨くことによって、仏の教えを正しく理解できればと願います。

苦

この人間世界は苦しみで満ちている。生も苦しみであり、

怨みあるものと会わなければならないことも、愛するものと別れなければならないことも、また求めて得られないことも苦しみである。まことに、執着を離れない人生はすべて苦しみである。

これを苦しみの真理「苦諦」という。

集

この人生の苦しみが、どうして起こるかというところ、それは人間の心につきまとう煩惱から起こる。その煩惱をつきつめていけば、生まれつき備わっている激しい欲望に根ざしている。

これを苦しみの原因「集諦」という。

滅

この煩惱の根本を残りになく滅ぼし尽くし、すべての執着を離れば人間の苦しみもなくなる。

これを苦しみを滅ぼす真理「滅諦」という。

道

この苦しみを滅ぼし尽くした境地に入るには、八つの正しい道(八正道)を修めなければならない。

これらの八つは欲望を滅ぼすための正しい道の真理「道諦」といわれる。

これらの真理を人はしっかり身につけなければならない。

「ブツダのおしえ」 仏教伝道協会刊より

『法華経』への誘い (一)

副住職 中島光信

『法華経』は日本仏教の源流にあり、千年以上の長きにわたって護持されてきた、日本文化の礎です。

激動の時代には、原点回帰が指針となるのではないかとそんな思いから、昨年の四月より、月に一度「二年かけて『法華経』を読む会」を始めました。およそ二年(全24回)かけて読了しようという企画で、この八月で15回目となります。

頭で理解する講義形式ではなく、まず行う、声をあわせお唱えする、行の形式です。ご一緒下さい。次回は八月二十日です。

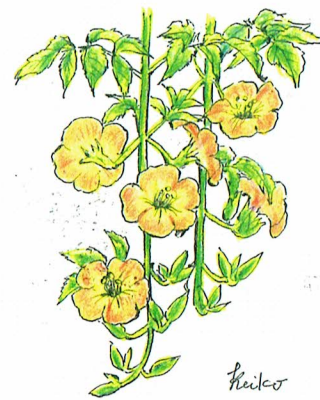
折りふしのはな

のうぜんかずら(凌霄の花)

真夏の強烈な日射しにも
負けないほど
色鮮やかなオレンジの
のうぜんかずら

平安時代に中国から
渡来したそうですから
清少納言や紫式部も
この花を

眺めていたのでしょうか (遊)



月例行事案内

◎八日 午後二時

薬師如来祈禱会 観音経読誦

◎十二日 午後二時

智泉院法要日(於・日本橋茅場町)

◎十八日 午後二時

観音経読誦法要(於・神木観音堂)

◎二十八日 午後二時

不動明王護摩供修行

*毎朝六時の朝参り(公開)を実施しています

ご都合のよろしい時にはご一緒にどうぞ

どなたさまでも
ご参詣下さい
(マスクはご着用下さい)

お施餓鬼のご案内

餓鬼にいろいろな飲食を施し、万霊の追福供養の法会です。今の自分に与えられた命を尊び、感謝し長生きを願う意味をもっています。

本年も自粛しコロナ対策の法要とします。例年より控え目のご参拝にご理解とご協力をお願いします。

記

*日	時	八月十五日(月)
*時	間	午後二時 法要開始

□8/20(土) 月例(要事前申込・各10名)

「止観(坐禅)会」9:30-10:30(¥500)
「法華経を読む会」11:00-12:00(¥300)

□2ヶ月連続 夏のインド音楽 奉納演奏Ⅱ

シタール/田中悠宇吾 タブラ/ヘマント

8月28日(日)護摩終了後 15:30~16:10頃
※聴聞無料(演者への寄付は随意にて)

あとがき

○安倍晋三元総理大臣が、奈良での街頭演説中に襲撃され死亡(7/8)というニュースは驚きでした。犯人の動機が宗教団体であったという事実も深刻です。国葬に是非論が…。

○コロナ禍が一向に収束に向かいません。夏休みで海や山へと開放的になりたい気分も、いま一つのもやもや感があります。

○鹿児島県の桜島で噴火(7/24)。最大警戒のレベル5に。火山列島日本は心配は尽きません。

○大リーグ大谷翔平選手が絶好調。二刀流での活躍は、「スーパースター」という呼び名にピッタリです。

○臭木の花にアゲハ蝶がたくさん集まっています。どうしてもこの木だけに…と自然界の不思議を思っています。

○境内では夏虫の代表格の蝉やカブト虫がすっかり少なくなってきました。寂しい気分です。しかし蚊まで少なくなり、この場合は喜ぶ身勝手な自分がいます。

咲き満ちて天の簪百日程

阿部みどり女